

068港区 三田

三田

三丁目に御田八幡神社がある。開基は和銅二年（709）といわれるが、御田の地名が始めて現れるのは十世紀の〔倭名類聚抄〕で、武蔵国荏原郡の御田郷として登場する。やがて「御」が「三」に略されていったと考えられている。

「三田」を代名詞とする慶応義塾は明治四年に移転してきたが、ここには国の重文に指定されている建築物がある。ひとつは、日本で最初の演説の訓練場として福沢諭吉が私財を投じて作った三田演説館。もうひとつは、創立五十周年記念事業の一環として完成した図書館。当時、帝国図書館に次ぐ大図書館だった。

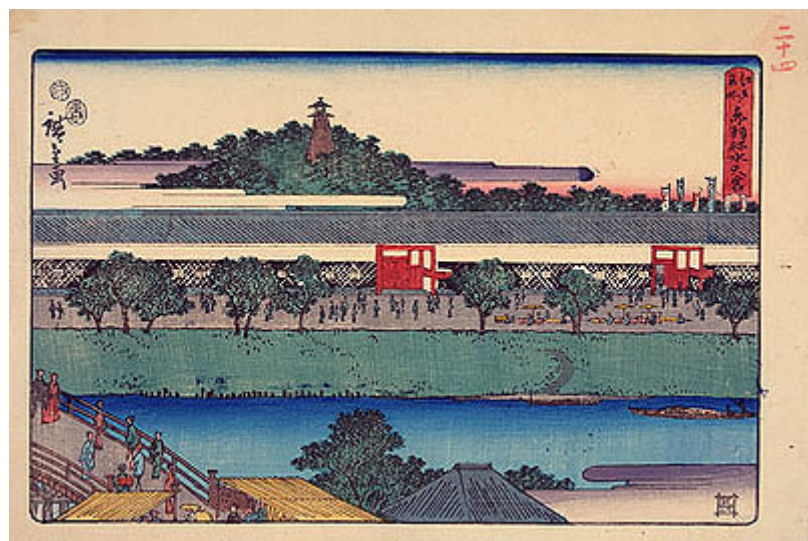
二丁目の中原街道の左手、江戸湾沿いに東海道が並行して延びており、豊後森藩久留島家上屋敷や亀山藩松平家下屋敷は、両街道に接していた。今、そこには三田中学（久留島藩）やマンション（亀山藩）が立つ。

三丁目に「札の辻」という交差点があるが、ここはお江戸日本橋を発した東海道と江戸城桜田門からの飯倉往還が会うところで、文字通り高札場があった。ちょうど、追分の逆で、東海道の脇街道として江戸城からの近道だった。高札場は天和三年、高輪大木戸に移っている。

増上寺と久留米有馬藩との関係

久留米有馬藩は、徳川幕府の四代将軍家綱の時代、寛文八年(1668)四月、三代藩主頼利が芝増上寺の「火の御番」を仰せ付けられて以来、十一代藩主頼咸の時代、文久年間(1860年代)まで代々その職に任じられた。徳川将軍家の霊廟がある上野の寛永寺と芝の増上寺を火難から守る「火の御番」役は、大名の名誉だが、大役でもあり、藩からの臨時出費を必要とした。

上野の寛永寺の火の御番は加賀藩前田家、



芝の増上寺の火の御番は久留米藩有馬家に下命されていた。「いざ火事」となれば、藩公が陣頭で火消し人足を指揮して火を防いだという。

水天宮の幟、火の見櫓、赤羽橋など有馬邸の様子を描いた広重の絵数点 (百景以外)

有馬藩の上屋敷は赤羽橋を渡った対岸にあり、増上寺には、この橋を渡って赤羽口より参内できた。また、有馬藩上屋敷内には水天宮社を祀り、小高い丘に、当時、既に火の見が設けられていたという。火の見は、江戸市民に「高いもんだ有馬の火の見」と評判になっていたという。(上の絵の真ん中丘の上に見える)

絵のタイトルは水天宮となっているが、歌川広重は有馬屋敷内の堀の中から微かにのぞく幟を描くのみで、むしろ長い堀に囲まれた有馬屋敷がモチーフとなっている。幟が「水天宮」を祀った場所である。



江戸っ子たちの間で篤い信仰を集め、堀越しにお賽銭を投げ入れる人が後を絶たず、ついに毎月五の日には参拝を願う江戸庶民のため門戸を開放した。

それが「どうでありまの水天宮」とうたわれ、安産の願いを叶えてくれるという評判で、有馬家と「情け深い」ことを掛けて「情けありまの水天宮」との洒落た言い習わしが広まり、「恐れ入谷の鬼子母神」と共に江戸の二大流行語となった。この水天宮が日本橋蛸殻町に移転したのは明治五年



(1872) のことである。(「051 日本橋蛸殻町」の項ご参照)

芝 赤羽橋之図 (安藤広重)。もうひとつの名物は、八代藩主頼貴(よりたか)公の時に幕府より大名火消を命ぜられて、三田台地に高さ三丈の火の見櫓を組んだことである。

他家のものは二丈五尺以内であったため、有馬家の火の見櫓は日本一と称され、江戸中から見えたといわれる。



古川（赤羽川）の上流から見た冬景色。右手が久留米有馬藩上屋敷、正面左手に小さく増上寺の五重塔が見える。素晴らしい景色である。(広重作)

「湯も水も火の見も有馬の名が高し」といわれ、有馬温泉、水天宮、火の見櫓も含む掛け言葉になっていた。火の見櫓については、今日、東京タワーが間近にそびえるという巡りあわせになっているのも一興である。上図で櫓の位置がはっきりする。

なお、久留米藩有馬家江戸屋敷は、上記の上屋敷のほか、現在水天宮がある日本橋蛸殻町に中屋敷、JR 品川駅西側の丘の上（高輪）に薩摩屋敷と道を隔て隣り合わせの下屋敷があった。有馬家墓所については「142 渋谷区広尾」の項ご参照。

有馬屋敷化け猫の話

化け猫といえば鍋島家があるが、港区三田一丁目の区立「赤羽小学校」の校舎裏にある「猫塚」の石塚は、江戸時代にこの場所に有馬屋敷があり、有馬家の化け猫騒動がここ江戸にも飛び火していたことを物語っている。

久留米藩の藩主有馬頼貴が寵愛していた側室に、お巻の方という美しい女性がいたが、

心も優しくかったので頼貴はことのほかこのお巻の方を愛した。それに嫉妬したのが他の側室たちで、共謀してお巻の方にあらぬ冤罪を被せ、それが原因でお巻の方は自殺してしまう。

そのお巻の方には一匹の飼猫がいたが、その猫は自分を大切にしてくれた主人を憶い、主人を亡き者にした側室たちに仇を報いようと、お巻の方に仕えていた奥女中のお仲に憑依（ひょうい）し、次々と怪死させていく。ところがある夜、舌を出してペロペロと行灯の油を舐めているところを目撃され、その正体がバレてしまう。そして有馬家の御抱え力士の小野川喜三郎によって、その化け猫は退治されたのだそうだ。

会津藩下屋敷（港区三田2丁目附近 綱坂）

万治元年（1658）、会津藩は三田に下屋敷を構え、幕末まで三田藩邸を本拠地とした。藩邸跡は今、慶応義塾中等部・慶応義塾女子高等と一部三井倶楽部敷地になっており、慶応義塾大学・イタリア大使館を挟んで綱坂が通っている。この辺は源頼光四天王の一人、渡辺綱が産湯を浸かったと言い伝えがあり、綱の地名が多く残っている。北側には島津藩の支藩日向佐土原藩島津邸（今三井倶楽部）で、御田とも表す三田には、この会津藩下屋敷から直線で約600M、徒歩で10分も掛からない所に、敵対し幕末焼き討ち事件のあった薩摩藩江戸屋敷、今NEC本社がある（現地名は三田ではなく芝）。なお、三井倶楽部は、大正2年三井財閥の迎賓館として完成した建物で、ニコライ堂などの設計を手掛けたイギリス人建築家ジョサイサ・コンドルの手によるものである。

会津藩始祖「保科正之」はこの三田屋敷で亡くなっている。

寛文十二年（1672年）十二月十八日、江戸三田の藩邸で死去。享年六十三没。生前より吉川惟足を師にト部家神道を学び、寛文六年（1666年）には領内の寺社を整理して神仏習合を排斥しており、神式で葬られた。霊社号は土津（はにつ）霊神。



綱坂の三井倶楽部

生前に神として祀られる生祠建立の計画があったが、実行される前に没した。墓所は

福島県耶麻郡猪苗代町 見祢山にある。以後、第二代・正経を除き会津藩主は神式で祀られている。延宝 三年（1675 年）、墓所に隣接して 土津神社 が建立され祭神として祀られた。

正之は幕府より 松平姓 を名乗ることを勧められたが、養育してくれた保科家への恩義を忘れず生涯保科姓を通した。第三代・正容 になって漸く松平姓と 葵の紋 が使用され、親藩 に列した。保科家との関係については「144 新宿区」の項ご参照。

保科正之

保科正之は、三代将軍・徳川家光の弟である。二代将軍秀忠が側室に生ませた子で、正室お江の方の嫉妬が凄まじいものだから、こっそり保科家へ養子に出されてしまった。

だから、家光も将軍になるまで、その弟の存在を知らなかったという。弟は弟で、自分は高貴の身にあることを知らされながらも、決してそれを表に出すことなく成長していく。

弟の存在を知らされた家光は驚くが、それでも正之をすぐ側に近づけることをしなかった。保科家の当主として江戸城に登城する姿を、陰からじっと観察する。将軍の弟に相応しい器の男かどうか見極めるためであったという。

正之は、大名たちの控えの部屋でも、廊下に近い下座にいつも座っていた。途中から将軍の弟君らしいということが分かって、他の大名たちが上座に勧めても、「自分は若いから」と言って動こうとはしない。困った大名たちは、やむを得ず正之の後ろに列をなして座ることにする。そうすると、部屋の中は空っぽで、部屋の入り口から廊下に、ずらずらと大名たちが並んで座るという奇妙な光景になってしまった。そんな正之が、家光によって引き上げられたのは言うまでもない。

正之は、家光のため、そして家光亡きあとは、家光の子・家綱のために終生尽くしていく。武断政治から文治政治への転換、善政をしいたとされる家綱の治世は、実は正之の采配によるところが極めて大であったという。

慶安事件の遠因とされる大名廃絶による浪人の増加を防ぐために執った「末期養子の禁」の緩和、それから大名人質制度の廃止、殉死の禁止は、家綱政権の「三大美事」とされている。また、玉川上水の建設、明暦の大火による被害者の救済と江戸復興計画の立案など、迅速な決断と実行力はまことに驚嘆すべきものがある。

かといって、焼失した江戸城天守閣の再建については、幕閣たちが強く望むなか、「無用の長物」として国費を費やすことに強く反対し、結局、幕末まで再建されることはなかった。

江戸にいたことが多かった正之だが、自らの藩政においても、社倉制度を創設し飢饉の年にも餓死者を一人も出さず、間引きの禁止、年金制度や救急医療制度の創設など、仁と徳の政治を徹底した。

晩年になって、家綱から「松平姓を名乗り、葵（あおい）の紋を家紋として用いよ」と命ぜられるが、臣下としての分を守るため、辞退する。そして正之が残した家訓の第一条には、「將軍家には一心に忠義に励め」そして「もし將軍家に逆意を抱くような藩主が現れたら、それはわが子孫ではないから従ってはならない」と定めている。

將軍家光の異母弟という身分にありながら、決して名利を求めず、驕ることなく忠勤と仁政を貫き通した清々しい生涯。後に、寛政の改革を取り仕切った松平定信の口癖は、「私がつねに心掛けているのは、かの保科肥後守さまのひそみに倣いたいということ」だったそうである。

幕末の藩主・松平容保はこの遺訓を守り、佐幕派の中心的存在として最後まで薩長軍と戦った。保科正之については「074 台東区・上野桜木」の項ご参照。

渡辺綱のこと

ここが産湯を浸かった所と言い伝えがあり、綱坂ほか地名に多くを残している渡辺綱とは一体なものか？まず、伝説から入る。

「綱坂」の由来は、羅生門の鬼退治で有名な平安時代の武士渡辺綱が付近で生まれたという伝説による。場所は、慶応義塾大学キャンパスの西側を、南から北に登る坂道で、坂の西側は綱町三井倶楽部、坂上の東側は駐日イタリア大使館の場所。

渡辺綱(953～1025)は、坂田公時（金時、「足柄山の金太郎」）、平（碓井）貞光、平（ト部）季武とならぶ源頼光の「四天王」の一人。嵯峨源氏から出て、摂津渡辺に移り渡辺姓を名乗った。頼光に従って、京都洛北の市原野で鬼同丸を、大江山で酒吞童子を殺し、また羅生門の鬼を退治したという伝説がある。一条戻橋で美女と出会うがこの正体が茨木童子と見破って、この片腕を切り落として持ち帰ったが、伯母に化けて館に現れた鬼に奪い返された、という伝説もあるという。



綱坂（この先は急な下り坂である）。右側が三井倶楽部の敷地でその裏庭に「綱の産湯の井戸」がある。非公開。

伝説はさておき史実としては、武蔵権介だった 嵯峨源氏 の 源宛 の子として 武蔵国足立郡 箕田郷（現・埼玉県鴻巣市）に生まれた。摂津源氏 の 源満仲 の娘婿である 仁明源氏 の 源敦 の養子となり、母方の里である 摂津国西成郡渡辺（現 大阪府大阪市中央区）に居住し、渡辺綱、あるいは渡辺源次綱、源次綱（げんじ つな）と称し、渡辺氏の祖となる。

謡曲『羅生門』は一条戻り橋の説話の舞台を 羅城門 に移しかえたものである。その子孫は 渡辺党 と呼ばれ、内裏警護に従事する 滝口武者 として、また 摂津国 の武士団として 住吉（住之江）の海（大阪湾）を本拠地として 瀬戸内海 の水軍を統轄し、源平の争乱から南北朝にかけて活躍した。九州の水軍 松浦党 の祖の 松浦久 もまた渡辺氏の出である。

先祖の 源融 は『源氏物語』の主人公の 光源氏 の実在モデルとされたが、綱も美男子として有名であった。また、大阪市北区の 梅田 界限には源融ゆかりの 太融寺 があり、その近くにある 露天神社（『曽根崎心中』で有名な「お初天神」）の宮司家や、渡辺姓発祥の神社とされる 座摩神社 の宮司家は渡辺綱の子孫である。

御田八幡神社（とびきり古い三田の地主神）

和銅二年創建と伝えられる。都内でも有数の古社。「御田」は「三田」の古称で、平安時代中期の「和名抄」に「御田郷」と記されている。江戸でも最古の地名の一つである。

御田の地名の由来には諸説があるが、朝廷に奉納する米を産する田圃があった、という説が一般的。こうした歴史から、三田の総鎮守として厚く信仰されてきた神社であるが、現在はそうした面影はあまりない。羅生門の鬼退治で知られる渡辺綱の氏神とされているところでもある。

石段左手の石垣にある、竜の形の注ぎ口から流れ落ちる水は、三田丘陵から湧出するもので、都心でも貴重な自然の湧水である。

玉鳳寺のお化粧地藏（三田 4－11－19）



三田の幽霊坂途中にある玉鳳寺。入り口すぐの左側の地蔵堂に、通称「お化粧地蔵」と呼ばれている顔が真っ白な地蔵さんがいる。口紅やマニキュ、ペディキュアまでも塗られている。江戸時代の寛永年間に、この寺の和尚さんが歩いていたら、八丁堀の地蔵橋畔に放置され風雨にさらされていた地蔵を発見した。泥にまみれて痛ましい姿だったので、水とたわしで一生懸命土を落とした。でも、汚れがなかなか落ちないため近隣の家からおしろいをもらって体に塗り、壊れた部分を修復した。

するときれいな姿になった。和尚さんは、これは素晴らしい地蔵だと思い、堂を立てようとした。あちこちを回り寄付を集め、慶安四年ついに堂を立てることができた。すると、不思議なことに和尚の顔にあった痣がいつのまにか消えていた。和尚さんは、これは地蔵さんの力によるものだと大変喜んだ。それ以来、霊驗があらたかであるとして広まって、多くの人が信仰するようになった。お地蔵さまは今日も女性たちの願いを受け止めて真っ白になっている。

江戸幕府の区画整理のため、八丁堀から現在地に移り今日に至る。

亀塚

現在の亀塚公園の場所（三田4-16-20）。近くに済海寺がある。
平安時代の菅原孝標女による「更級日記」にある、竹芝寺伝説の地と伝えられるところ。

都の御所の警備をしていた武蔵国出の若者と皇女が恋におち、駆け落ちしてきたのが、かつてここにあった竹芝寺。

古くから、皇女の墓ではないかと伝わる亀塚は、古代の秘めたるロマンを伝えている。

この先の薬王寺には、「朝顔に つるべとられてもらひ水」と詠んだ、江戸中期の女流歌人、加賀千代ゆかりの「朝顔の井戸」がある。

近くの済海寺は、幕末の安政六年、最初のフランス公使館がおかれたところである。

おわり

次 項 へ